川上 高司 ブログ アーカイヴ

2014年

9月2日

戦略家プーチン－経済制裁転じて好機となす。

ウクライナでは、親ロシア武装勢力がウクライナの国際空港を制圧しウクライナ軍が空港から撤退した。ウクライナ政府は「ロシアが戦争を始めた」と非難しているが、ロシアは親ロシア派には軍事支援はしていないと否定、相変わらず主張は並行線である。

EU ではさらなる経済制裁をロシアに課すべきだとの強硬論が日ましに強まり、ヨーロッパの中ではプーチン大統領と親しいドイツのメルケル首相の立場が苦しいものになりつつある。

昨年 11 月にウクライナで問題が起こって以来、メルケル首相とプーチン大統領は公式には 25 回の電話会談をもった。実際にはそれ以上の会談が行われたとも言われているが、そのすべてがウクライナに関することだった。ワールドカップの決勝戦の会場で談笑する 2 人の姿が目撃されているが、それほどに 2 人は緊密なやりとりを継続してきている。

ロシアにとってメルケル首相は関係のこじれたヨーロッパの中でロシアに理解があり信頼できる外交ルートとして重要な存在だった。一方ヨーロッパにとってもメルケル首相はロシアの真意を測り交渉可能な外交ルートとして期待が高かった。

だが、10 か月をすぎてもヨーロッパとロシアの関係は改善せず悪化の一途を辿っている。ドイツも他のヨーロッパ諸国の圧力に配慮してロシアへの経済制裁にも加わるようになった。つまりメルケル首相の電話外交は失敗しつつあるということだ。

これから冬に向かうヨーロッパにとってウクライナ問題が解決しないことは、ロシアからの安定した天然ガスの供給が期待できないということを意味しており、代替供給先の確保がヨーロッパにとっては急務となりつつある。

一方ロシアも供給先をヨーロッパに依存するのではなく多様化しなければならない。プーチン大統領は中国へのパイプライン敷設工事を始めると発表し、2019 年のガスの中国への供給開始を目指す。東シベリアのチャヤンダガス田から 4000 キロメートルのパイプラインが敷設されれば、今後 30 年間で 4000 億ドルのガス契約が現実のものとなり中ロの関係は強まっていく。ロシアは中国に対して東シベリアの石油プラント開発への参加にゴーサインを出すなど、中国との関係強化はますます深化する。

ヨーロッパとの関係悪化がロシアの関心を東へと向けさせ中国へと接近させたが世界の警察官を降りて孤立主義に向かうアメリカの方針と相まって、ユーラシア大陸のハートランドに中ロの勢力圏が確立することのインパクトは大きい。

9月7日

ロシアに宣戦布告したISIS

ISIS は、アメリカ人ジャーナリストのフォーリー氏についでソトロフ氏を処刑するビデオを公開した。2 人目の犠牲者がでたことでオバマ大統領はアメリカ市民に脅威が迫っているとし、「ISIS を壊滅させることが目標だ」と ISIS と闘うことを宣言し正義がなされることを誓った。この強硬な姿勢に政権内では反対の声もないようで、アメリカは再びイラクへと戻ることになる。

一方で ISIS はロシアのプーチン大統領に対して宣戦布告をするビデオメッセージを公開した。ビデオによれば、ロシアはアサド政権に対してヘリコプターや戦闘機などの軍事支援をしさらにイラクへも戦闘機を送って支援を表明しているからその報復としてロシアも攻撃のターゲットとすると宣言したのである。

ISIS にはチェチェンや北コーカサス地方出身者が少なくない。彼らが実戦経験を積んで帰国すれば熾烈な闘争が始まりかねない。ISIS の宣戦布告は決して絵空事ではないのである。ISIS はプーチン大統領に対して名指しで「おまえの地位はもう危ない。我々がロシアに辿り着いたらおしまいだ」と脅している。

アメリカにとってもロシアにとっても、またイランなどの周辺国、ヨーロッパや世界各国にとっても最大級の脅威となりつつある ISIS だが、共通の脅威となるのであればたとえ現状の関係が険悪でも関係諸国が協力して対処する道を模索するべきだろう。ここでも米露の協力体制が必要とされている。

9月29日

やはり米露関係が鍵となるISIS問題

1 年前の 9 月は、アメリカがシリアへ空爆をすると宣言し世界が新たな戦争が起こるのではと震撼していた。このとき世界で反対運動が起こり国や宗教を超えて反戦が強く訴えられ、またロシアがシリアの化学兵器放棄の仲介をしたため空爆は見送られ、世界は安堵に包まれた。そして米露関係の改善が予感された。

そして今年の 9 月、オバマ大統領は ISIS を脅威とみなしてイラクやシリアの ISIS の拠点を空爆開始した。今回は昨年と異なり国際社会の支持が高かった。 空爆を受けているシリア政府もアメリカの空爆が ISIS をターゲットに絞っているため歓迎している。

オバマ大統領は NATO 諸国と会談し、主要国だけでなくトルコやオーストラリアなどからも支持を取り付けた。さらにアラブ諸国からも同意を取り付けて入念に下地を作った。シリアの支援国であるイランへは空爆の前に通告するという徹底ぶりである。

だが、肝心のロシアの協力は得られていない。アメリカは水面下でロシアへ秋波を送って協力を呼びかけているが、ロシアは応じる気配がない。ロシアはシリア政府に軍事支援を実施している。それに対してアメリカは反政府勢力を支援している。今回のアメリカの空爆の本当の意図はアサド政権の転覆ではないかという不信感がロシアを消極的にしているのである。

9 月 15 日パリで開かれたイラクに関する国際会議では、ケリー長官はアメリカはアサド大統領を退陣させる意図はないとロシアのラブロフ外相へ呼びかけた。さらに

その後、米露の外交専門家たちがモスクワで極秘会合を開いたが、ロシア側の反応は冷たかった。

シリア問題では溝が埋まらないがイラク問題では協力しあえるのではと期待をこめてアメリカはロシアへイラクでの協力を呼びかけるが、ロシアの不信感は解消されないようである。

ISIS やシリアの問題でロシアの協力は不可欠である。だがアメリカのシリア反政府側への関与やウクライナ問題でひびの入った信頼関係を修復するのは容易ではない。それでも希望がないわけではない。ロシアにとっても ISIS は脅威である。その脅威がロシアにとって無視できないほど高まれば協力姿勢に転じる可能性はある。地道な外交努力が求められている。